
猫神社

_瑠姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫神社

【Nコード】

N4088BA

【作者名】

— 瑠姫

【あらすじ】

主人公・葉月が住んでいるところにはある噂がある。

噂、というかマジで出る話。それを確かめるため行動を起こすが…

…

第一話 猫道!?

「にゃー…ごっ」

あくびをするような猫の鳴き声にビビり後ろを振り返るとやっぱり猫がいた。

猫もこちらに気づいたようで慌てて去ってゆく。

私の名前は大原葉月。おおはらはつき

小学6年生の極々普通の女子である。

私がいまいる場所は家からちょっと離れたところにある道。

お母さんからのおつかいの帰りだ。

ネギがささったもう行き慣れたスーパーのレジ袋を右手に持ちもう通り慣れたはずのこの道を歩く。

通りなれているはずなのに足はカクカクと細かく震えている。

寒さのせいだ、と無理矢理考え込み前を見た。

この道は私の通ってる小学校でも、近所でも有名。

ここらへんの人なら知らない人はいないだろう。

「猫道」と呼ばれている道。

名前は極々普通でよそからきた人でわかるくらい単純。

「猫がいつぱいいる道」で猫道。

単純すぎて笑える。

しかしこのへんの爺や婆は笑わなかった。

それどころか大人はみんなこの道を避けた。

猫がいるだけなのに、どうして？

皆、そう思うことだろう。

それは、この道は出るから。

これは本^{マジ}気だ。

それも品のない怪談話や自殺した女が出るとかじゃない。

猫が出るのだ。

……わかるだろうか？

説明するのが難しいのだが、しつぽが二つある猫が出るらしい。

見たことは……

あれは2年前。

見てしまったのだ。

この道を歩いていたとき。

そのときはまだその尻尾しっぽが二つの猫の話を信じてはいなかった。

しかし、いつものようにおつかいの帰り道に

普通の猫より低い声の鳴き声がしたと思い振向いたら

いた。

ずっしりと重そうな体つきにオヤジのようなポーズ。

そしてなにより人間臭いあの低い声。

もう一目散に帰って近所の人とか家族に話した。

みんな驚いたりお経的なものを唱えたり…

ウチの婆様に限ってはぶっ倒れた。

そんなヤバイものなのかと近所の子供たちは皆震え上がって…

もうこの道を通る者は少ない。

まあ、私はこの道を通ってるのだが。

恐怖は感じるもののココを通らなければ帰れない。

そんなとき、ある奴に声をかけられた。

第二話 キムチ鍋

「オイ、なにやってんの？」

心臓が凍りついた。

うん。もう凍りつきそうとかのレベルじゃない。

ゆっくりと振り返る。

引きつる私の笑顔。

「あは…相沢…」

相沢とは私の家のとなりに住んでいる者。

私より20年上だ。

なぜか苗字で呼び合っている…。

「いまどきココの道通ってるのってお前くらいだぞ…」

そうボソツと呟きレジ袋の中身を覗く。

「んん…ネギに豆腐…えのき…」

ブツブツと中身を言ってゆく相沢。眉間にはシワが…険しい顔。

「キタッ!! キムチのもと!!」

「は？」

確かにキムチのもととは入ってるけど…なにか？

いきなり叫んでガツポーズしている相沢に戸惑いを隠せない私。

「お前んち今日の夕飯キムチ鍋か!! 食いに行くからおばさんに言っというて!!」

「は!!!!!!?」

さっきより大きな声で問う。

しかし自由奔放な彼が聞くはずも答えるはずもなく…

キムチ鍋がすきなのか? 変わってるな…

なんて考えながら前を見たらもう相沢はいなかった。

かなり前を全速力でスキップ調に走っている。

そうそう、猫道は真っ直ぐな一本道で100メートル先ぐらいは見える。

「ミャーオ…」

可愛くて小さい猫が足元に擦り寄ってきたのでそつと引き剥がし親と思われる茂みの中にいる猫の近くに置いた。

第三話 噂

『いっただっきまあす!!!!!!』

私のお父さん、お母さん。

そして相沢。

まあ相沢は明るいうちに食べに来るって報告してきたからよいけど。

相沢のお母さん、そしてお父さんも一緒だった。

笑顔で一番先に鍋へ箸を伸ばしたのは相沢のお母さん。

「おいしいわぁ♪さすが奥さん!!!!」

「あらぁ鍋は得意なのよ!!!!」

さっきまで何でコイツラもいるんだよ的な顔をしてたお母さんも

相沢のお母さんの言葉で上機嫌。

っつか人んちのご飯たべる相沢も

それについてきた父親も

笑顔で一番先に食べ始める母親も

ソイツの煽てですぐ上機嫌になるお母さんも

それになにもいわないお父さんも

おかしい〜〜！！！！

「ごちそうさま…」

何かに負けた気がして食が進まず一番先に茶碗を下げた。

「あらあ、もう終わり？葉月ちゃん？もっと食べないとお〜」

お母さんとしゃべっていた相沢のお母さんがいう。

お前んちじゃねーよ！！と心の中でツツコミを入れ自分の部屋に戻った。

そしてすぐベッドに飛び込み身を沈めた。

遠くに聞こえてくるあの人たちの笑い声。

妙に疲れるんだよね…：相沢のお母さんといると…

コンコン

「ふえ〜い」

突然なったノックに驚きながらも返事をする。

「葉月？ どうしたの？」

クッションをかかえ起き上がる私。

入ってきたのは相沢だった。

「別に…ご飯は？」

「食べ終わった。葉月、怒ってんの？」

「別に！！」

強がってみたりする。

「というか怒ってる？ と聞かれはい、怒ってますという人がどこに
いるの？」

「ああもうしょうがないなあ、相沢お兄様が面白い話してやろう!」

ぶすつと軽く相沢を睨んだが彼はもう話す気満々だった。

「猫道があるだろ!!?」

「……うん…」

話せとも言っていないのにしょうがないなあ、とかいう態度で話し始める相沢。

ムカつくなあ…

「まーっすぐだけど突き当たりがあるだろ!!?」

あるだろ!!?が多くない?コイツ…

「その突き当たり小さい神社的なトコがあんだろ!!?」

乱暴になってきてるぞ…

というかその神社って神社とはいえないくらい小さい祠じゃん。

しかし相沢は怪訝そうな顔をする私を置いて一人で夢の世界へと旅立っていった。

ようにキラキラと瞳を輝かせている。

そして息をすうっと吸った。

こりゃ大声で最後のシメを言う気だな…

耳をふさぐ。

「その神社にお供え物をして願い事すると願いが叶うんだってー
ーッッ!!」

予想以上の大声を出す相沢。

瞬間「うるさい!!!!」と相沢のお母さんから怒り声が聞こえた。

キャピキャピとクラスの女子のように生き生きと喋る相沢。

「くだんな……」

「マジだって!!!!俺、叶ったんだってば!!」

「!!!??」

クッションを放り投げる。

「マジで!!!??なに願ったの!!!??」

「えへへ…絶対嘘だと思ってて…ケーキが食べたいって願ったんだ。そしたら…」

「…その日のおやつがケーキだったワケね。はいはい」

舌を出して喋る相沢はちよつとだけ子供に見えた。

でも…神社…気になる…

相沢のは偶然だろうけど。

もしかしたら…叶うのかも…？

女子はやっぱりこういう噂が気になるように出来てるんだよ。

私はばつちり脳みそ内にそれを記録して相沢を追い出した。

第四話 晴れた日の日曜日

今日は日曜日。

天気は快晴。

学校はない。

友達と会う約束をしている。

プルルルップルル：

「はいはい♪」

突然鳴った携帯で急いでとったが相手は誰だか分かった。

『やっほ！葉月、今から行くねえ♪ ほなみと愛梨えりも一緒だから
あー！！』

「OK！！ 待ってるね」

そういい終わったと同時に電話は切れた。

今の電話の相手は同じクラスの友達、立川麻奈。たちかわまな

同じく友達の氷野ほなみと吉田愛梨よしだえりも一緒にいるらしい。

麻奈、大変だろうな…

ほなみと愛梨えりはどっちかっていうと妹キャラ。

キャラっていうか…妹そのもの。

甘えてくるときは可愛いんだけど、我儘わがまま…。

それを麻奈が大体かまってあげてるんだけど。

3人きりとなってうちんちに来るんだったら大変だろうな…

そう。それでその4人でドコに行くかっていうと…

「猫神社行くんだろ？」

2階の私の部屋の窓の外から聞こえてきたその声。

しかしもう慣れていた。

「相沢…そこから入るなって言ってるでしょ」

「あいあい…んで？行くの？」

曖昧な返事をし窓から部屋に入ってくる相沢。

そのままベッドに横になった。

窓のカギ閉めとくんだった…ちくしょー

つかオイオイ、まだ午前10時だぞ…寝るのかよ

あからさまに嫌な顔をしている私を無視して眠りにつこうとする
相沢に何も言わず

椅子に座った。

「猫神社、行くけど…？何か悪い？」

「悪くはないけど、マジで出るぜ？」

相沢が時々するマジな顔。怖さを余計引き立てた。

その目線に反抗するように大声をたてついでに椅子からもたつた。

「いいもん!! 願い事するんだもん!!」

「お供えモンは？」

ズバツと放たれたその一言。膝ひざかっくんされた感じ…?

「麻奈とほなみと愛梨えりでコンビニ寄ってから行くし…」

「なにお供えすんの？」

「えッ…おかしとか？」

「ふうん…」

流れる沈黙。

これ以上会話は続かないと確信して相沢のシャツの襟をつかみ窓から相沢の家の部屋にブチ込んだ。

「いってえな!! へタしたら今俺死んでたぞ!!」

「知らないし！！ってかもう行くから！！じゃーねっ」

乱暴に窓をしめカギもしめカーテンもしめ、部屋からでた。

家を出たところでちょうど3人に会った。

「コンビニ行ってから行こうか…」

3人は私の意見に同意しコンビニに向かい足を進めた。

みんな無言。

みんな知ってるからだ。

オカルト好きなツインテール娘、ほなみのために4人でいるときに

相沢に教えてもらった話をしたら

ほなみと愛梨が行きたいと騒ぎ出し…

今日、行くことになった。

無言で足を進めたらすぐコンビニに着き、カゴをとる。

「とりあえず…キャットフードッ？」

「えッ」

麻奈が言ったキャットフード発言にビビった。

しかしそれは私だけっぽくて。

そうか、猫だもんね。お菓子だとか考えてた私、馬鹿らしい〜

「あたしはねえ、持参してきたの！！ネコ缶とカツオブシと魚肉ソーセージ！」

誇らしげに背負っていたリュックからそれらのものをとりだし見せびらかすほなみ。

店員さんから睨まれる。

分かりやすくツインテールが垂れ下がりにょぼん、としていたが

麻奈が「ほなみ、ウチらでもお菓子食べよっか」の一言で元氣を取り戻した。

それぞれお供え物と食べるお菓子を買ってコンビニから出たときは11時だった。

「行こうか…」

進む先は猫神社。

でも、恐怖より好奇心のほうがこのときは勝っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088ba/>

猫神社

2012年1月11日19時53分発行